

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401/044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第137号

多摩丘陵に残る
 義経の面影 - 9

長尾の妙楽寺と義経 (その1)

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

多摩丘陵の東南、多摩区长尾にアジサイ寺として有名な天台宗薬王院妙楽寺があります。この寺のご本尊は『阿弥陀如来』で、仁寿元年(851)円仁が創建したといわれています。

また、この多摩丘陵には小沢城、枳形城、作延城、井田城などの山城が連なっており、源頼朝の鎌倉幕府は、多摩川と右岸の丘陵地帯(多摩の横山)は外郭防衛線であり、大変重要な防衛ラインでした。妙楽寺も、これ等山城と共に多摩川を眼下に見下ろす眺めの良いところに位置しています。

このお寺には薬師堂と言う薬師三尊像が客仏として祀った堂宇がありました。仏像の傷みがひどく昭和52年(1977)東京芸術大学美術学部の本間紀男教授に修理を依頼したところ、次のことが分かりました。薬師如来坐像は胎内の背面の墨書から永正6年(1509)9月の制作で、顔の表情・寄木の構造も室町時代末期の特徴が良く表れています。日光菩薩像は胎内の墨書から、薬師如来像より遅れて天文16年(1547)に制作されたことと、妙楽寺が長尾山医光寺の旧跡であることが分かりました。医光寺は、文徳



天台宗 長尾山 妙楽寺



薬師如来坐像(中央)と両脇地蔵
 (右:日光菩薩、左:月光菩薩)



日光菩薩胎内の墨書

天皇の仁寿年中(851~4)の創建と伝えられ、源氏代々の祈願寺として保護されてきたそうです。

鎌倉時代初期におけるこの寺の隆盛は吾妻鏡からも知る事が出来ます。医光寺は、かなり大きな伽藍を持っていましたので、妙楽寺は医光寺の一坊であったのかも知れませんね。現在では、この薬師堂も新しく建てられて立派になっております。

話は変わって、常磐御前と源義朝との間に生まれた長兄の今若は、京都の醍醐寺に出家させられ悪禅師 全成(ゼツジョウ)と名乗っていましたが、頼朝が平家追討の旗揚げをした際、義経よりも早く、この坂東までやって来ます。石橋山の戦いで頼朝が敗北した直後の8月26日、近江源氏の佐々木4兄弟等と行き会い相模国高座郡渋谷荘(現在の小田急線高座渋谷駅周辺)に匿われ、10月1日下総国鷺沼の宿所で頼朝と対面を果たしました。兄弟の中で最初の対面であり、頼朝は泣いてその志を喜んだといひます。頼朝の信頼を得た全成は、医光寺の院主を与えられるのです。

(この稿 続く)

特別寄稿

鎮守の森の意義

— 白鳥(しらとり)神社の森をみて思う —

品川哲彦(関西大学文学部教授)

草むした登り道を折れ曲がり、小暗い森のなかの鳥居に行き着く。そこでとびはねると、足元でドンといううつろな反響がする。鳥居をはさむ二本の大木の根があるからだといわれていた。その大木は新羅三郎源義光が植えたものだと言いつたされていた。昭和41年にかやぶきから赤い屋根に変わったものの、小さな社は杉の大木のなかに隠れて森の気配に包まれている。かすかに落ちる木漏れ日のなかで、御手洗(みたらい)の石に彫られた字は「嘉永壬子九月吉日」と読める。——子どもの頃の私にとって、白鳥神社はそういう場所だった。

白鳥神社の故事は郷土史に詳しい方にお任せして、神社の森の意義という話をしたい。

明治39年、神社合祀(ごうし)令が発令された。国家の定めた基準を満たさない神社は廃止して、近隣の神社と統合し、一町村一社に整理せよという命令だった。日露戦争で疲弊した国民のあいだに精神的な一体感を作り出し、しかも神社を廃して田畑になれば税収も上がるという意図もあったようだ。その満たすべき基準とは、古代の法令「延喜式」や官選の歴史「六国史」に記載されているとか、皇室とのゆかりがあるとか、権威を保つだけの資産があるというものだった。これでは、いかに村民が親しんでいても貧しい村社は消えてしまう。このとき敢然と反対の声を挙げたのが生物学者・民俗学者の南方熊楠(みなかたくまぐす)だった。南方の論拠は、鎮守の森は貴重な生き物の住処で、その生き物たちがいてはじめて田畑を含むその土地の生態系ができていく。森のある神社は生まれ故郷を象徴しており、慰安の場、交流の場であり、祭りなどでは地域の経済を潤すのにも寄与している。森のなかに社を建て、参る者たちに神への畏(おそ)れと謙譲の気持ちをおのずと醸(かも)して悪心を妨げる、等々だった。

神社合祀令は、結局、全国的には徹底されぬうちに終わった。南方の反対運動が功を奏したともいえないが、南方の洞察はあっていた。森と信仰と暮らしのつながりには根強いものがあつたのだ。人びとは森に象徴される自然のなかに人間を超える存在を感じ取り、自然は暮らしを脅かすものが成り立たせてもくれ、人間はそのなかで生まれ死に、次の世代に受け継がれてゆく。万物に命を認め、

命の循環を信じるこうした考え(アニミズム)は、神社合祀令の背景にある国家神道よりさらに深い層で神道や日本の仏教に流れている。田畑が激減した今も、その発想は、トトロをはじめ、日本のアニメのなかになお息づいている。

白鳥神社の木立は小田急多摩線から住宅地のなかにこんもりと突き出て見える。新年には、昔と変わって大勢が列をなして参拝する。並ぶのは親に任せて、子どもは社の傍の公園で遊びに夢中だ。だがおそらくこの子たちにも、鎮守の森の記憶は受け継がれることだろう。



白鳥神社

【著者略歴】 1957年、片平に生まれる。柿生小、柿生中、多摩高を経て京都大学に進学。京都大学から博士(文学)を授与。専門は哲学・倫理学。広島大学助教授等を経て現職。著書に『倫理学の話』(ナカニシヤ出版)など。

【注】小島一也氏の「麻生の歴史を探る」は休載いたします。

シリーズ
教育の歩み 第2部

学級の誕生(7)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆見習い教師制度の誕生と枢密院教育委員会◆

前号に記した深刻な教員不足を補うためには、田山花袋の『田舎教師』の主人公のような助教師の採用が、避けて通れない道でした。1846年に、枢密院教育委員会が始めた「見習い教師制度」は、初等学校を終了した14歳から17歳までの若者を、見習い教員として雇用し、5年間の見習い期間修了後に師範学校に進学させることで、正規の教員として育て上げようという壮大な計画でした。増加する学校、増加する教室の需要を賄うには、大量の教員がすぐにでも必要だったのです。その需要を満たすには、従来の学校をリードしてきたモニトリアル・システムの改良しか打つ手がありませんでした。こうして有給の見習教員として、若者を訓練することになったのです。ただしそこには、国家による一定の枠が設けられていました。

見習教員を受け入れることが出来る学校は、一定の条件をクリアできた学校だけに制限されたのです。その条件は、(1)校長が見習い教員を教育するに必要な資格を具備していること、(2)学校の図書や設備が整っていること、(3)5年間の見習い期間中の給与をきちんと支払い続けられるだけの財政基盤が整っていること、の3点でした。

こうした教員養成機関の側の条件の外に、見習教員を正規の教員に認定するための条件も定められました。見習教員の読み方、書き方、計算、さらに地理などの学力についての規定です。その上、毎週正規の教員から受ける訓練の時間数も決められ、さらに毎年の訓練の進捗状況が点検され、これらすべてをクリアした上で、正規の教員に昇格するための最終試験に合格することが求められたのです。

こうして教員の水準、教員養成における教育内容の水準が明記され、学校施設の最低基準も設けられたのです。当然、こうした見習教員制度の導入や教員養成学校の創設は、国家の教育費補助金を増加させました。出費項目も次第に増加し、1860年代に入ると、国家予算に占める教育費の割合は、1/6近くまで増加したのです。当時はクリミア戦争(1853~56年)の戦費負担で、財政難に喘いでいる時期でしたから、政府と議会は巨大化した教育費負担に関心を抱き、国庫負担が正しく使われているか否か、調査を開始したのです。1858年に下院に設置されたニューカッスル委員会です。委員会は、教員の恣意的な好みからもたらされる歪みや、補助金の効果の有無について、とても敏感でした。その結果、有資格の教員は、初歩の読み書き計算の授業をやりたがらず、上級クラスの授業ばかりを担当したが、低年齢、低学力クラスの授業には、関心を示さないでいる事実が浮かび上がりました。低学力のクラスでは、早期に退学してしまう生徒も多く、まともな読み書き能力を身に着けずに、中途退学してしまうような生徒が多かったのです。本来、このような生徒たちこそ補助金の効果は発揮されるべきであるのに、そうはなっていなかったのです。苦しい財政の中から、高額の予算を支出しているのに、期待した成果は上げられずにいたのです。では、どうしたらよいのか？

この問題は、より本質的な地域間格差の問題もあぶりだしました。数回前に記したように、学校建設費の半額国庫補助が実現していましたが、補助は半額ですから、残り半額の手当てをどうするかという問題が残っていたのです。土地のやせている地域の農村や、都市のスラム街などの貧しい地域では、半額の負担など用意できるはずがないのです。社会の底辺に暮らす人々が寄り集まって生きている極貧地区では、子どもたちのための学校を建設することは、夢のまた夢だったのです。半額のみという補助金支給制度は、豊かな地域にこそ恩恵をもたらす、地域間格差を拡大する方向に働いていたのです。何とも皮肉な巡り合わせでした。現在でも同じようなことが起きますが、自助努力を要求するという、無駄遣いを避けるつもりの措置に潜む矛盾の一つが、ここに見事に現れていたのです。

ニューカッスル委員会が明らかにしたのは、先生の好みによる偏りの発生と地域間格差の問題でした。特に教師の好みによる成果の偏りの問題は、「組織は合理的であるべきだ」とする命題に照らすと、重大な問題でした。この問題を放置しておいたのでは、全国一律どのレベルの生徒でも、どこにいても同じような教育を受けることが出来るという、大きな狙いが実現できなくなってしまいます。こうして、従来の国庫補助の仕組みでは、教育サービスの品質保証が担保されていないことがやり玉に挙がったのです。(続く)



国庫の半額補助で建設されたバラック建築の初等学校

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

10月 5・12・26日(毎土曜日)

11月 3・10・17・24日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (10月19日は休館です)

第81回 カルチャーセミナー

先史時代の川崎の海は？

～1万年超の縄文時代に川崎の海はどのように変化したか～

講師の松島先生は、玉川大学、日本大学、北里大学などで教鞭をとられる傍ら、神奈川県立博物館の地学専門の学芸員を務め、川崎駅前地下商店街アゼリアの発掘調査を担当、古生物学の研究にも勤しみ、縄文海進の研究に一石を投じられた方です。そんな先生に早期縄文時代から、古墳時代にかけて、川崎の海がどのように変化したか、やさしくお話しいただきます。

日時：10月26日(土) 午後1時30分～3時30分

講師：松島義章氏(古生物学者)

会場：柿生郷土史料館特別展示室

第17回 特別企画展

「江戸時代の道中日記を読む」

～ 古文書輪読会の学習の成果から ～

当館主催の古文書輪読会では、旧王禅寺村青戸家に保存されていた『道中日記』2点を寄贈いただき、読み進めています。今回はまだ途中ですが、その内容の一端を古文書解読文に地図や資料を付けて紹介いたします。

寛政10年(1798)の旅は80日余りの大旅行。旅人は毎日どのくらい歩いたの？参詣した寺社はどこ？…私たちの今の旅との違いを実感していただければ幸いです。

期間 10月5日(土)～2020年1月26日(土)

会場 柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会 第11回史跡見学バスの旅

江戸の寺巡り

～第1回 将軍家の菩提寺とゆかりの深い寺巡り～

日 時：2019年11月6日(水)

主な見学先：増上寺 将軍家の菩提寺 (秀忠、家宣、家継、家重、家慶、家茂)

寛永寺 将軍家の菩提寺 (家綱、綱吉、吉宗、家治、家斉、家定)

泉岳寺 赤穂浪士47士の墓所

護国寺 幕府の祈願寺

雑司ヶ谷墓地 夏目漱石ら多くの著名人

募集人員：先着45名

集合：午前7時45分 新百合丘駅北口

解散：午後6時頃(新百合丘駅北口→柿生駅付近)

費用：8,500円(昼食付)

申し込み：往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで

必要事項：参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先：215-0021 川崎市麻生区上麻生6-40-1 柿生中学校内 柿生郷土史料館
(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切：10月1日(火)

問合せ先：小林基男 080-5513-5154 または 044-989-0622

またはメール zabi@za.wakwak.com

旧王禅寺村は増上寺の寺領でした。